



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日清戦争前後の中国の『申報』からみる天皇のイメージ
Author(s)	景, 麗
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 27, 53-69
Issue Date	2018-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71722
Type	departmental bulletin paper
File Information	053-070_jing.pdf



日清戦争前後の『申報』 からみる天皇のイメージ

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院 博士課程

景 麗

景
麗
JING LI

The Changing Image of the Japanese Emperor in Shenbao, before and after the First Sino-Japanese War

JING LI

abstract

Using narrative structure analysis and narrative content analysis, this article will describe how the image of the Japanese emperor was constructed in Shenbao, and the influence of Japanese media, before and after the First Sino-Japanese War (1894-1896). There were three periods regarding how the Japanese emperor was referred to in Shenbao. In the first period the image of the Japanese emperor in objective and subjective narrative was as a modern and military emperor who was respected by the people. However, in the second period the Japanese emperor was mostly depicted as a tyrant and the cause of war in subjective narrative. Finally, in the third period the image of the Japanese emperor in both objective and subjective narrative was as a modern, military emperor who was widely popular and the reason for successful modernization in Japan.

1 はじめに

中国の近代において、上海は新聞が多く発行され、同時にナショナリズムの揺籃の地でもあった¹。この新聞とナショナリズムの関係について、Mittler (2004 : 361) は、「新聞には世界に対する意識及び自己と他者の差異を生産する能力があるので、ナショナリズムを形成する非凡な力を持っている」という。さらに、Duaraはコミュニティの成員間関係としての民族的「自我」ないし国家意識は、いつも「他者」によって定義され、歴史とともに変化し、社会的変遷を反映する相対的アイデンティティであると指摘した²。つまり、「自己」は常にある「他者」にとっての存在であり、さらに、「他者」のイメージを通して、「自己」の姿を映すという方法で自己理解を深めるのである。したがって、近代における中国の国家意識ないしナショナリズムを理解するために、新聞が構築した「他者」のイメージを見ることが重要であると言える。

かつての中国では、華夷秩序の天下観に基づいて、世界秩序を理解していた。浜下武志 (2007 : 9) によれば、「中国から見て、華夷秩序に基づいた四囲認識には、東夷・南蛮・西戎・北狄があり、この四囲を皇帝の徳治によって教化するという階梯には、中華が中央から発せられ、その影響が地方・異民族・異地域へとしだいに拡張する同心円的な関係が存在した」という。浜下は中華的世界秩序では、皇帝の徳治を絶対至高なものと前提するために、他者に対する認識枠組みをもたず、内と外の区別がなかったと指摘した³。さらに、「中華」について、アンダーソン (2012 : 35) は「主として聖なる言語と書かれた文字を媒体とすることによってはじめて想像可能となったのだ」という。こうした伝統的中国は政治的実体であるよりも、むしろ文化的事実であると言える⁴。また、アンダーソンはこうした聖なる言語で結ばれた古典的共同体と近代国民の想像の共同体との決定的違いは、聖なる言語による改宗の可能性、あるいは人間存在の本性を变形する可能性を有することであると指摘した⁵。例えば、「モンゴル人」、「満州人」が中国化して「天子」になる可能性がある。すなわち、近代国民国家と異なり、伝統的中国では、「自己」と「他者」は、絶対的な境界線を持たず、客観化されえないのである。

1840年のアヘン戦争から、伝統的な文化主義を中心とする華夷秩序の天下観が絶えず列強の挑戦を受け、領土的な境界線を画定する近代国民国家の成立を中国に迫った。このように、近代以降、ナショナリズムは生産と再生産を繰り返し、膨張していった⁶。Rowe (2009 : 224) は、「清国の最後の半世紀に、西洋列強の国々ではなく、日本が中華帝国に最も危険な海外の敵対者として登場した」という。つまり、清朝の末期において、中国の国家意識ないしナショナリズムの形成にとって、日本は最も重要な「他者」になったのだ。また、山室信一 (2004 : 148) は、「中国が国民国家形成に向けて動き出したのは、アヘン戦争やアロー号戦争の結果によってではなく、日清 (甲午) 戦争の敗戦を契機としていた」と述べている。

▶1 Mittler (2004) p.361を参照

▶2 Duara (1995) pp.13-15を参照

▶3 浜下武志 (1997) 9頁-11頁、20頁-21頁を参照

▶4 ラッセル (1975) 234頁を参照

▶5 アンダーソン (2007) 35頁-38頁を参照

▶6 Mittler (2004) p.397を参照

▶7 山室信一 (2004) 254頁を参照

▶8 山室信一 (2004) 281頁-282頁、300頁；王曉光 (1998) 38頁を参照

▶9 Wagner (2001: 11) によれば、前近代の中国では「エリートたちが共有していた政治哲学では、皇帝が中央の象徴として社会的秩序と精神的統一の最も重要な源であるということがベースにあると考えられていた」という。Duara (1995: 58) によれば、伝統的中国社会では、文化主義の影響で、「このコミュニティのメンバーシップは、中国の皇帝を中心に回った中国における理念や倫理に対する忠誠を体現する儀式に参加することによって定義された」という。

▶10 Britton (1933) p.68を参照

▶11 Rowe (2009) p.251を参照

▶12 本論文のすべての記事は申報館 (<http://www.sbsjk.com/ser.jsp>) によった。

日清戦争の直後、康有為、梁啓超をはじめ、維新派の知識人たちは「変法と興学養才」を中心に、日本を模範として国民国家形成を推進していく。維新派は政治体制の変革による新たな国家—「新中国」と近代学校教育による新たな国民—「新民」の形成を目指した⁷。1898年、維新派の愛国救亡運動による戊戌維新が起きた。王曉秋 (1991: 143) によれば、彼らの変法運動は「最も重要な方法として、皇帝に上書して彼らの心中の天皇—即ち光緒帝が「君権を行使して厳格迅速に事を行い」、明治維新という青写真にならって変法の命を下し、上から下への新政改革を実行するよう促すこと」だという。つまり、維新派にとって中国を近代国民国家に変革する最も重要な方法は、光緒帝を明治天皇のような君主に生まれ変わらせることだったのである⁸。

中国の皇帝は、社会秩序と精神的統一の最も重要な源であり、国家と国民を形作る大きな要因であった⁹。日清戦争の際、中国にとって、日本の天皇は極めて重要な「他者」であり、近代国民国家形成の最も重要なカギに映った。したがって、当時の中国の人々は、日本の天皇のイメージを通して、近代における民族的「自我」の意識を深めていったと想像できる。

1872年4月30日に、イギリス人のErnest Majorが上海の居留地で創刊した『申報』は当時の新聞界を牛耳る存在であった¹⁰。Wagner (2001: 3) によれば、『申報』は少なくとも1905年まで最も重要な中国語の新聞として普遍的に認められていた」という。またRoweは清朝末期において、『申報』は維新派の政治的利益を代表し、彼らの公共圏への参与と国際的な視野の養成を促進し、トランスローカルなネットワークの形成に極めて重要な役割を果たしたと指摘した¹¹。つまり、日清戦争の際、『申報』は上海の新聞の中で、極めて重要な地位を占め、中国における国家意識ないしナショナリズムの形成に大きな役割を果たし、維新派に多大な影響を与えたと言えるのである。

『申報』からみる中国におけるナショナリズムについての先行研究はすでに存在する。Mittler (2004) の第六章*The Nature of Chinese Nationalism-Reading Shanghai Newspaper, 1900-1925*では、1900年から1925年までのいくつかのナショナリズムの運動をめぐる、『申報』をはじめ上海の新聞を中心に、中国におけるナショナリズムの言説の特徴を論じている。しかし、ここでは日清戦争についてはほとんど言及されていない。また、当時の天皇のイメージに関する研究は、日本における天皇イメージに関するものに限定される。多木浩二の『天皇の肖像』は代表的研究である。ここでは、中国において天皇のイメージがどのように形成されたのかはほとんど述べられていない。さらに、維新派の近代国家意識に関する多くの研究は、主に維新派の政治活動、文化活動を中心に彼らの近代国家意識が記述されている。吉澤誠一郎『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国みる』、山室信一『思想課題としてのアジア—基軸、連鎖、投企』はその代表的研究である。しかしそれらの先行研究では、『申報』の役割は言及されていない。つまり、本研究の主題となる中国における近代国家形成の範となる日本の天皇のイメージについては、十分な研究がなされてこなかったのである。したがって、本論文では中国における天皇イメージに着目し、日清戦争前後、『申報』がいかに日本の天皇のイメージを構築していったのかを明らかにする¹²。

2 論文の構成と方法論

Wagnerは清朝末期、北京を中心に垂直的なコミュニケーションを重視する伝統的公共圏と、上海を中心に水平的なコミュニケーションを促す新しい公共圏が同時に存在していたと指摘した¹³。本論文の研究対象とする『申報』はまさに上海における水平的なコミュニケーションを促進する新聞であった。そのような新しい公共圏におけるメディア環境と『申報』をめぐる具体的状況は天皇のイメージの形成に大きな影響を与えたと考える。さらに、イメージの分析方法は、鈴木裕久・島崎哲彦の物語分析を使用する。鈴木裕久・島崎哲彦（2006：140）によれば、「物語分析は、物語構造分析と物語内容分析に大別できる」という。

本論文の本論は二つの部分からなる。一つは、天皇のイメージの形成背景としての媒体環境（上海を中心とする水平的なコミュニケーションを促進する新しい公共圏と『申報』）を検討すること。もう一つは、物語構造分析と物語内容分析を中心に、日清戦争前後の『申報』からみる天皇に関する数多くの物語がどのように天皇のイメージを構築したかを分析する。

▶13 Wagner (2007) pp.2-7; Wagner (2001) pp.6-14を参照

3 『申報』をめぐる環境

3-1. 新しい公共圏の誕生

アヘン戦争以降、中国とイギリスが締結した『南京条約』によって、1843年に上海が開港された。その後、大勢の外国人が上海に移り住み、外国人居留地が生まれた。上海の居留地は単一の国の植民地ではなく、列強が治外法権を行使する形で形成された。1854年に工部局という自治行政機関が設置され、上海の居留地を管理した。Wagner（2001：4）によれば、「居留地は自らの富と偉業を誇示し、自らは清朝政府と外国の領事館から独立していることを強調した」という。1872年4月30日に、イギリス人のErnest Majorは上海の居留地に『申報』を創刊した。当時の中国政府の新聞政策について、Britton（1933：3-4）は「中国の新聞は報道の自由のすべてのメリットとデメリットを享受した。中国の新聞出版業には、独占権、事前検閲、税金、許可証はなかった。さらに、登記の必要さえなかった」と述べている。Mittler（2004：3）によれば、「上海の出版物に対して、実際に規制し、影響を与える国家実体は存在しなかった（中略）『申報』は当時世界の中で最も独立した新聞の一つであった」という。また、19世紀後半における上海の新しい公共圏について、Wagnerはそれが均質的ではなく、高い国際性と多様性を有していたと指摘している¹⁴。

▶14 19世紀の上海と中国の公共圏の特徴について、Wagner（2007：4）は、「まず、公共圏は国家の境界線を共にするのではなく、むしろ基本的に多国的で、国際的なものである。次は、公共圏は均質的ではなく、開放性と文明化された合理性の程度から空間の差異性を示す。さらに、公共圏は表現を高水準かつ合理的な範囲の発言とそれを生み出すことができる社会の部分に制限しない。それは社会の様々な部分、多様な大衆の処理での表現と行動の形式の全範囲の使用をマークする」という。

3-2. 『申報』の状況

次に『申報』を見てみよう。イギリス人のErnest Majorはもともとビジネスマンであり、『申報』を創刊する前、すでに起業しその事業は成功していた。よって、Mittler (2004: 3) によれば、「純粋な商業的冒険として、『申報』は19世紀後半に中国で出版された宣教師または宣伝の新聞に関連するイデオロギーの負担を免れた」というのだ。また、戈公振 (1927: 79) は、「Ernest Majorはイギリス人であるが、『申報』はビジネスを前提としていた。これは中国人向けの新聞であり、言論は拘束されなかった」と述べている。すなわち、『申報』という新聞の特徴はビジネスを前提とした、イデオロギーの負担が少ない商業紙であったことである。

しかし同時に『申報』の経営方針は単に経済的利益を求めるだけではなく、「義」にも配慮している点は見逃せない。創刊から三年後、1875年10月11日の『申報』に掲げられた「本新聞社の設立目的」（「論本館作報本意」）でその目的を、「正直にいえば経済的利益を求めるためである。自らが「義」だけに従うことを自慢することはできないが、「義」をすべて忘れることもできない」とうたっている。当時の中国の読者は少なからず『申報』が、常に西洋人を褒め、中国人を貶めることに不満を抱いていたという。それゆえ、人々の非難を回避するために、「義」の解釈を提出したとも言える。著者は「本新聞社が西洋諸国の長所を記録するその目的は、中国が西洋を見習い、西洋人と利益を分かち合うことができるようにするためである」と述べている。つまり、『申報』にとって、中国の読者たちは消費者であるが、他方で啓蒙の対象でもあったのである。

Ernest Majorは中国語に堪能で、時に彼は「申報主人」の筆名で、社説や告知などを書いていた。Britton (1933: 70) によれば、「Ernest Majorは自分と新聞とのつながりを消し、中国の人々にとって緊急に必要とする新聞を中国人が創設するという判断を下した」という。すなわち、『申報』の記事や編集をほとんど中国人に任せていた。『申報』の記事について、徐載平・徐瑞芳 (1988: 45) は「1872年に創刊されて以来20年あまりの間、新聞に載せた文は徐々に難解なものから理解しやすいものへ進歩してきた（中略）1905年の『申報』大改革の前は、社説とニュースという二種類しかなかった」という。

清朝の末期の新聞界は「有聞必録」という原則を信奉した¹⁵。当時『申報』の報道原則も「有聞必録」と言えるものだった¹⁶。さらに、1884年4月16日の『申報』に掲げられた「越南の軍事情報を論ず」（「論越南軍信」）という記事では、『申報』の「有聞必録」という原則を具体的に解釈している。「本新聞社は「有聞必録」という原則に従う。伝言であれ、電報であれ、中国、西側のニュースに関わらず、フランスや越南の軍事状況に関する情報があれば、すべて掲載し、皆に読んでもらう。情報の真偽が判断できないので、任意に情報を取捨選択することは不都合だ。読みたい人たちは自ら判断することができる。だが、掲載された諸手紙は実際に真実なものとは限らない」という。すなわち、『申報』の「有聞必録」という原則は、情報を判断する責任を読

▶15 邵振青 (1923) 4頁；徐宝璜 (1930) 13頁-15頁、43頁を参照

▶16 徐載平・徐瑞芳 (1988) 46頁-47頁；操瑞青 (2015) 99頁-116頁を参照 操瑞青 (2015) は『申報』の「有聞必録」の核心思想が全面性の原則に従うことであるが、情報選択が完全に無かったとは言えないと指摘した。

者に任せることにより、その言説の多様性や種々のイデオロギーの並存を可能にするのである。

以上、当時の上海の『申報』をめぐる状況を示した。ここから、上海を中心におこった水平的なコミュニケーションを促進する新しい公共圏は、政治的権力から一定の距離を置いていたことが理解できる。つまり、『申報』は独立した新聞であり、ひとつのイデオロギーに偏らない商業新聞であったのだ。加えて『申報』は「有聞必録」という原則を信奉し、情報を判断する責任を読者にゆだね、多様な言説と種々のイデオロギーが並存するプラットフォームであったのである。

4 日清戦争前後の『申報』から見る 天皇のイメージ

4-1. 研究の時間幅と段階の分類

次にその『申報』に現れた天皇イメージについて見てみよう。原田敬一(2008:38)は「広義の「日清戦争」は、七月二十三日に始まり、台湾征服戦争が一段落して、大本営が解散した一八九六年四月一日に終わったと考えるのが、もっともふさわしい」と述べている。対戦国と戦闘地域によって、日清戦争は三つの段階に分けられる。日本と朝鮮との戦争(1894年7月23日から7月24日まで)、日本と清との戦争(1894年7月25日から1895年3月29日まで)、日本と台湾との戦争(1896年4月1日まで)の三段階である。したがって、本論文の分析は1894年1月1日から1896年12月31日までとする。

この時期の天皇の呼称には、主に「日王」、「日皇」、「天皇」、「倭主」、「偽天皇」という5つがある。これらの呼称は二種類に分けられる。一つは、「日王」、「日皇」、「天皇」という中立的な呼称である。もう一つは、「倭主」、「偽天皇」という負の感情を込めた呼称である。「倭主」は、倭寇の首領を意味する。『中国語大辞典』(1994:3232)によれば、「倭は古く日本のことを指した(中略)倭寇の意味は14~16世紀、朝鮮半島や中国沿海地方を荒らした日本の海賊」という。つまり、「倭主」という呼称には、「夷」としての日本人のイメージが含まれているのである。すなわち、伝統的中国における華夷秩序の天下観に基づいて、「自己」と「他者」を解釈していると言える。さらに、「偽」の意味は「非合法の、傀儡的な、人民に支持されない」(『中国語大辞典』(1994:3202))というものだ。「偽天皇」は、非合法の、人民に支持されない日本の統治者を意味すると解釈できる。ここで強調すべきは、『申報』が1872年に創刊されてから1949年に廃刊されるまで、およそ77年の間、日本の天皇を「倭主」と「偽天皇」と呼ぶのは、日清戦争の際だけであるということだ。天皇に関する呼称のほとんどは、「日王」、「日皇」、「天皇」のような負の感情やイメージを排除したものであった。

また、1894年から1896年までの期間、二種類の呼称は同時に用いられることはほとんどなかった。「倭主」という呼称を使う記事は66点であったが、こ

の66点の記事のうち、57点はニュース、9点は社説である。初めて「倭主」という呼称が登場するのは、1894年9月12日の「倭主の離京」（「倭主離京」というニュースである。最後に「倭主」という呼称が使われた記事は、1895年5月18日の「条約改定の補足」（「補述改約」）である。さらに、「偽天皇」という呼称は4点の記事で使われている。この4点のうち、社説は1点（1894年12月26日の「倭の状況をはかる」（「測倭篇」）、ニュースは3点（1894年12月25日の「倭奴が媚びること」「倭奴獻媚」、1895年4月1日の「反乱行為記（三）」（「逆蹟記三」）、1895年4月2日の「反乱行為記（四）」（「逆蹟記四」）である。つまり、すべて「偽天皇」という呼称は「倭主」と同時期（1894年9月12日～1895年5月18日）に使われているのである。さらに、この間、負の感情やイメージを込めない「日王」は2点の社説にしか使用されていない。具体的に言えば、1894年9月29日の「倭を平定する意見」（「平倭芻議」）と1894年10月15日の「日本を制する方法」（「論制日本自有其道」）である。要するに、「倭主」と「偽天皇」という呼称は日本と清との戦争及び『下関条約』を締結した直後（1895年4月17日）に集中しているのである。

したがって、本論文では、天皇の呼称の種類によって、1894年から1896年までの間を三つの時期に分ける。第一段階は、1894年1月1日から1894年9月11日まで、つまり、主に負の感情やイメージを伴わない時期である。第二段階は、1894年9月12日から1895年5月18日まで、「倭主」と「偽天皇」が集中的に使われる時期である。第三段階は、1895年5月19日から1896年12月31日まで、天皇の呼称に負の感情が再度なくなる時期である。

4-2. 物語構造分析

4-2-1. 物語のモデルと文体

鈴木裕久・島崎哲彦（2006：140）によると「物語構造分析では、語られている内容や意味を無視して、テキストの形式的側面が問題にされる」という。物語構造分析の方法は、物語の物理的特性の測定と文体的特徴の分析を提示する¹⁷。物語の物理的特性については次の節に触れるが、ここでは文体の特徴に注目する。

小森陽一（1988a：9）は、「文体的表徴は、常に物語の表徴として機能する」と述べている。つまり、文体と物語は深く関連し、あるジャンルの文体が選ばれたら、そのジャンルの物語が始動し、また、物語のモデルから文体の特徴も理解できるというのだ。物語のモデルについて、鈴木裕久・島崎哲彦（2006：136）は「一方の極の新聞の事件報道記事のような客観性を標榜している記述の物語と、他方の極のドラマや映画のような「物語のための物語」という二つのモデル¹⁸があると主張する。言い換えると、物語の語り方によって、物語が二種類に分けられるのである。

一つは客観的物語である。このような物語では、「客観的視点」ないし「神の視点」が暗黙のうちに要求される。従ってそのように、語られる内容はあたかも客観的に実在するかのように、語り手の主観的意識から独立する。それは、アンダーソンが提示する近代国民国家の形成に関わるニュースや小説

▶17 鈴木裕久・島崎哲彦（2006）140頁を参照

▶18 物語のモデルについて、エーコ（2003：109）によれば、「ヴァン・ディク（1974b）は自然的物語と人工的物語を区別し、どちらも行動記述の例であるが、前者は実際に起こったものとして提示される出来事に関係する（たとえば新聞ニュース）に対して、後者は、われわれの経験世界とは異なる可能世界に帰せられる個体と事実に関わる」という。

の語り方である。そのような語り方をアンダーソン（2012：50）は、「十八世紀ヨーロッパに初めて開花した二つの想像の様式、小説と新聞の基本構造」という。すなわち、近代以降に、客観的物語が形成されたというのである。この語り方は言文一致でもある。客観的物語は絶対的判断に近い。なぜなら「客観的視点」ないし「神の視点」は他の可能性を排除するからである。

もう一つが主観的物語である。このような物語では、語り手の主観的意識あるいは主観的視点は語られる内容に置かれ、語られる内容と離脱しないことが求められる。つまり、語られる内容は客観的に実在するものではなく、語り手によって構成されるからだ。たとえば、司馬遷の「史記」のほとんどの文には、「太史公曰」という言葉がつき、文に司馬遷の感情、思想が直接込められる。このように、物語は司馬遷という個人に帰属する。また、日本の昔話について、柳田国男（1978：80）は、「我々がハナシといっているもののうちで、「昔々ある処に」という類の文句を持って始まり、話の句切りごとに必ずトサ・ゲナ・ソウナ・トイウなどの語を附して、それが又聴きであることを示し、最後に一定の今は無意識に近い言葉をもって、話の終わりを明らかにしたもの、この形式を具備したのが日本では昔話、西洋の人たちは民間説話とでも訳すべき語をもって呼んでいる特殊の文芸である」という。ここで強調したいのは、「又聴き」の主体は語り手に他ならないという点だ。つまり、「伝聞」、「引用」などの言語行為から、語り手は語られる内容を構成するのである。要するに、主観的物語は長い歴史を持つ伝統的物語だという点だ。主観的物語は相対的判断に近い。なぜなら、「主観的視点」で語るとは、この視点以外の他の視点の可能性も同時に存在することを意味するからである。

中国にせよ、日本にせよ、主観的物語は伝統的物語であった。しかし、日清戦争の際、日本では言文一致という近代的文体が広く普及していた。それに対して、中国では、言文一致はまだ普及していなかった。文体分析からみれば、『申報』の記事の天皇に関する言文一致の記事は、日本の新聞から翻訳されたものの可能性が高いということが推測できる。その理由は以下の通りだ。

李孝徳（1997：118）によれば、日本において「明治二十年代の文学がそれなりの完成度を持った言文一致を実現できていた」という。また、小森陽一（1988b：36）は、日本近代のジャーナリズム・新聞記者の使命が、「何よりも事件や事実の在りようを、どれだけ正確に、臨場感に満ちた形で、そしてその事件の核心を明示するように報道できるか」にある。（森田）思軒が『郵便報知新聞』の記者として活躍した時代は、自由民権運動の退潮期にあたり、新聞の紙面がそれまでの政論中心から、事実、事件の報道を中心とする方向に転換していく過渡期であった」という。つまり、日清戦争の際、日本では文学にせよ、新聞にせよ、言文一致という近代的文体がかなり実現したと言えるのである。

それに対して、清朝の文体について、内藤湖南（1993：199）は、「駢散不分家といふのは、清朝で発達した文選体の極盛の時期である」と述べている。駢体文と散文は相対する文言文の文体である。駢体文は、後漢に遡って、四

▶19 内藤湖南（1993）190頁-200頁を参照

▶20 Mittler（2004）p.54を参照

字六字の対句を使い、文章の形式の美を重視する文体である。それに対して、散文は、唐・宋の時代に広く流行し、形式より内容を重視し、対句を使わない単体文である。駢散不分家は二つの文体の長所を調和するものと言える¹⁹。Mittlerは清朝末期、中国語新聞のスタイルが中国文学の影響を強く受けていたと指摘した²⁰。また、清朝末期の新聞文体について、1898年8月24日の『申報』に掲げられた「新聞の務めを整理する」（「整頓報務餘言」）の中で、「新聞と論説の文体は大体駢散不分家という文体である」という。中国の「新文体」の成立は梁啓超が生み出した。内藤湖南（1993：200）によると、「尚ほ近代になりまして梁啓超や其他の人が日本へ来て、日本の新聞などの文章を読んで、自由自在に物の書けることに感服して、新聞の文章などを見て文章を書くといふのが近來の文体であります」という。梁啓超が初めて日本に来たのは1898年のことである。つまり、日清戦争の際、中国の文学や新聞の文体から見れば、言文一致という近代的文体ではなく、主に伝統的文体で語っていたのである。よって、『申報』の記事を分析する際、文体に着目する必要があるのである。

4-2-2. 天皇に関する物語の物語構造分析

これから、天皇の呼称の種類によって分けられる三段階に基づき、天皇の物語の物語構造分析を行う。第一に、各段階の記事の数量、類型、紙面、提示した情報経路などの物語の物理的特性を分析する。

■表1 記事の数量、類型

時期	ニュース	社説	合計
第一段階（1894年1月1日～1894年9月11日）	26点	3点	29点
第二段階（1894年9月12日～1895年5月18日）	59点	11点	70点
第三段階（1895年5月19日～1896年12月31日）	41点	0点	41点

まず、三つの段階の記事の数量、類型を表1にまとめた。表1からわかるように、第一段階（1894年1月1日から1894年9月11日まで）では、ニュースは26点、社説は3点、合わせて29点である。3点の社説は、1894年7月24日の「西洋の新聞からみる日本の兵制」（「譯西報述日本兵制」）、1894年8月16日の「日本人が戦端を開くことについて客人が語る」（「日人啓釁客述」）、1894年8月22日の「天討篇」（「天討篇」）。その三つは日清戦争開戦後に発表されたものである。第二段階（1894年9月12日から1895年5月18日まで）では、ニュースは59点、社説は11点、合計で70点ある。第三段階（1895年5月19日から1896年12月31日まで）では、ニュースは41点、社説は0点である。以上のように、ほとんどの社説は日本と清との戦争（1894年7月25日から1895年3月29日まで）及び『下関条約』を締結した直後（1895年4月17日）に集中的に現れていることがわかる。それ以外の時期、天皇は主にニュースの中で登場する。

■表2 掲載された紙面

時期	第1面	第2面	第3面	第9面	合計	第1面の 記事の割合
第一段階	3点 (3点社説)	21点	4点	1点	29点	10.34%
第二段階	29点 (11点社説)	37点	2点	2点	70点	41.43%
第三段階	15点	23点	3点	0点	41点	36.59%

さらに、三段階の記事の紙面を表2にまとめた。表2からわかるように、第一段階では、第1面に掲載した記事は3点、2面は21点、3面は4点、9面は1点となる。そのうち、1面の記事の割合は10.34%となる。第二段階では、1面に掲げた記事は29点、2面は37点、3面は2点、9面は2点である。そのうち、1面掲載の記事の割合は41.43%に達している。第三段階では、1面掲載の記事は15点、2面は23点、3面は3点である。そのうち、1面掲載の記事の割合は36.59%となっている。三段階の記事の紙面から見ると、第二段階は1面に掲載した記事の比率が最も高く、第三段階は第一段階より1面掲載の記事の比率が高かったことがわかる。このように、天皇に関する記事の重要度の変化がわかる。

■表3 記事の情報経路

時期	手紙	電信	伝聞	他の 新聞	合計	記事の 総数	情報経路の ある記事の割合
第一段階	2点	0点	3点	4点	9点	29点	31.03%
第二段階	13点	13点	12点	22点	60点	70点	85.71%
第三段階	7点	3点	1点	6点	16点	41点	39.24%

また、三段階の記事の中で提示された情報経路を調査し表3にまとめた。表3からわかるように、第一段階では、手紙が2点、電信が0点、伝聞が3点、他の新聞が4点で、明確に情報経路を提示した記事の割合は31.03%である。第二段階では、手紙が13点、電信が13点、伝聞が12点、他の新聞が22点で、情報経路のある記事の割合は85.71%を占める。第三段階では、手紙が7点、電信が3点、伝聞が1点、他の新聞が6点で、情報経路のある記事の割合は39.24%となっている。以上のように、第二段階は、情報経路の多様性が高く、文章の情報経路が相対的に明確になっている時期といえる。さらに、第三段階は第一段階より、情報経路の多様性と情報経路が明示された記事の割合が多くなっていることもわかる。ここで確認をしておきたいのは、明確に情報経路が提示されている記事は「又聴き」という形で語る主観的物語であるという点である²¹。客観的物語では、一部分が文章のタイトルから情報経路を提示している。なお、この問題については本節の最後で具体的例を挙げる。

第二に、各段階の文体の特徴について説明する。まず、客観的物語と主観的物語に大きく区分する。その上で、主観的物語では、「史記」のように直接

▶21 昔話では、「話の句切りごとに必ずトサ・ゲナ・ソウナ・トイウなどの語を附」するが、情報経路が示されている新聞記事では、常に情報の情報経路を示し、この情報は伝聞だと確認できる。いずれにせよ、言葉による伝達関係を提示する。これによって語られる世界は経験的に自明な世界ではなく、ただ実際に経験されうる可能性を持った世界である。エーコの考え方から見れば、こうした可能世界に帰せられるのは人工的物語（フィクションとしての主観的物語）と言える。（注18を参照）

的に語り手の感情と考えを表すAタイプの語り方と直接的に語り手の感情や考えを入れず、日本の昔話のように「又聴き」という形のBタイプの語り方に分けられる。ここで強調したいのはAタイプの語り方とBタイプの語り方は互いに排除せず、両立できるという点だ。したがって、主観的物語は、Aタイプ、Bタイプ、ABタイプに分類される。各段階の文体の特徴を表4で整理した。

(表4) 語り方の相違

時期	客観的物語	主観的物語	合計
第一段階	16点	A : 4点 B : 4点 AB : 5点 (合計 : 13点)	29点
第二段階	0点	A : 11点 B : 7点 AB : 52点 (合計 : 70点)	70点
第三段階	18点	A : 5点 B : 14点 AB : 4点 (合計 : 23点)	41点

表4からわかるように、第一段階では、客観的物語が16点、主観的物語が13点である。主観的物語では、語り手の感情や考えを直接に表すAタイプは4点、「又聴き」という形のBタイプは4点、AタイプとBタイプを含むABタイプは5点である。第二段階では、客観的物語は0点、主観的物語が70点である。主観的物語では、Aタイプは11点、Bタイプは7点、ABタイプは52点である。第三段階では、客観的物語は18点、主観的物語は23点である。主観的物語では、Aタイプは5点、Bタイプは14点、ABタイプは4点である。以上のように、第二段階では、天皇に関する物語はすべて主観的物語であることがわかる。さらにこの時期に、「又聴き」の語り方と語り手の感情や考えを直接に表現する語り方を一緒に使う傾向が最も強いことがわかる。また、第一段階では、客観的物語は主観的物語と比べて多数を占めるが、第三段階では、主観的物語は客観的物語より多く使われている。さらに、第三段階の主観的物語では、第一段階と比べて、「又聴き」というBタイプの語り方の使用は大きく増加していることが分かる。

ここで確認をしておきたいことは、主観的物語と客観的物語という二つの点からみると、『申報』が天皇のイメージを構築する過程において、日本の新聞が重要な役割を果たしたという点である。まず、主観的物語の状況进行分析。記事の中ではっきり情報経路が提示されている記事は「又聴き」という形で語る主観的物語である。表3からわかるように、他の新聞からの記事は、全部で32点となる。このうち、日本の新聞からのものは19点で、59.37%に達している。つまり、主観的物語の中では、日本の新聞は他の新聞より多くの情報を提供したといえるのだ。

さらに、客観的物語の状況を見ると、表4からわかるように、第一段階と第三段階では、記事は全部で70点にのぼる。そのうち、客観的物語は34点で、48.57%となっている。日清戦争の際、日本と中国の文体から見れば、日本では言文一致という近代の文体がかなりの程度確立していたが、中国では、言文一致という近代の文体はまだ普及していなかった。多くの記事を文体とタイトルからみると、日本の新聞から翻訳されたことがわかる。例えば、1894

年1月4日の「日報照譯」、1894年3月22日の「東報譯登」、1894年5月19日、1894年6月10日の「東報彙譯」、1895年8月16日、1895年9月30日の「東報雜譯」などは、タイトルで日本の新聞の記事の翻訳であることをうたっている²²。

日本と中国の文体の状況と「有聞必録」という原則から考えれば、これらの言文一致という近代的文体ないし客観的物語は日本のニュースをそのまま翻訳したものであると考えられる。つまり、『申報』にとって、日本の新聞は重要な情報経路として天皇の情報を提供しただけではなく、日本の新聞における近代的文体で語る天皇に関する物語は、そのまま『申報』に入りこみ、中国人読者に共有されるようになったのである。要するに、日本の新聞は天皇のイメージの構築過程に重要な役割を果たしたと言える。

4-3. 物語内容分析

鈴木裕久・島崎哲彦は物語内容分析の基礎作業となる手順を提示した²³。まず、時間的順序に従って、言明、物語、単位物語などを再配列する必要があるという²⁴。次に、ある観点を定め、各言明に対して、「好意的—非好意的」、「積極的—消極的」、「理性的—情動的」、「幸せな—不幸な」、「原因—結果」の次元を用いて分析するのである。また、繰り返し出てくるパターンを探す。こうした反復パターンこそが物語の「主題」となる。物語主題の分析は帰納的な性格をもち、いくつかの物語を分析対象とする場合には、共通に適用できるカテゴリー・セットにまとめられる²⁵。さらに、本人を含めた全登場人物に、その役割の行為の主体となるのか、あるいは行為の対象となるのかを検討する。最後に、事象を説明するために用いられている比喩ないしモデルを抽出する。そのような手順である。

物語の時間的順序は物語の発表時間とする。さらに、天皇の呼称の種類によって、三段階に分ける。また、各段階の物語は大きく客観的物語と主観的物語という二つのモデルの物語に分類する。さらに、二つのモデルの物語の内容を要約し、次元、主題、役割、比喩という手順に従って、分析する。

これから、第一段階の二つのモデルの物語の内容を整理する。まず、第一段階の客観的物語は16点（ニュース16点）である。これらの物語では、天皇に関連する内容は主に行事（新年行事）、儀式活動（銀婚記念）、政治活動（議会開院への参加、外交活動、爵位、栄誉、賞金などの授与）、軍事活動（青山練兵場での閲兵（陸軍）、横須賀軍港の検閲（海軍））、民間活動（上野公園の遊覧、第二次漆工競技會と春季美術展覽會への参加）、生活（花見、熾仁親王との会食）などである。

さらに、第一段階の主観的物語は13点（ニュース10点、社説3点）である。これらの物語は、日清戦争の勃発によって、二つに分けられる。一つは1894年7月23日以前の9点である。これらの物語では、天皇に関する主な内容は、天皇の銀婚について、儀式、日本の官民の祝い、練兵場での閲兵、日本領事館の祝いの盛況ぶりなどである。また、天皇は日本の名医である浅田宗伯に弔慰金を贈ったことがあげられる。さらに、大地震の直後、天皇は遣使して、太后を慰問し、中央気象庁の状況をたずねた。また、天皇は朝鮮に派遣された将士を激励した。天皇は香港のペストを治療する医者の方を安否を気遣い、電

▶22 例えば、1895年8月16日の『申報』の「東報雜譯」のニュースは1895年7月18日の『朝日新聞』1頁の「雜報」の内容から翻訳したことが確認できるが、『申報』は一部の内容を省略している。

▶23 鈴木裕久・島崎哲彦（2006）141頁-142頁を参照

▶24 言明（具体的にはセンテンス）、物語（時間的推移を表すように有機的に連関している言明のセット）、単位物語（複数の物語）鈴木裕久・島崎哲彦（2006）134頁；140頁を参照

▶25 鈴木裕久・島崎哲彦（2006）139頁を参照

信で状況をたずね、その後、医者たちに高い栄誉を与えた。もう一つは、1894年7月23日以降の4点の主観的物語（ニュース1点、社説3点）である。1894年8月23日の「仏の足にすがりつく」（「抱佛脚」）では、天皇が上野東叡山寛永寺での臨時大祈禱を「抱佛脚」と解釈した。「抱佛脚」は熟語であり、「仏の足にすがりつく、苦しいときの神頼み」という意味である（『中国語大辞典』（1994：125））。1894年7月24日の「西洋の新聞からみる日本の兵制」（「譯西報述日本兵制」）では、天皇が西洋の制度を模倣し、軍事制度を改革するが、天皇の改革では、日本の壮士は自立することができないと述べている。さらに、1894年8月16日の「日本人が戦端を開くことを客人が語る」（「日人啓蒙客述」）では、「今度日本が戦争を起こした原因が分かった。これはたぶん天皇の本意ではなく、大臣たちの所為である」と述べている。さらに、天皇は激怒し、大臣と対立する場面も見える。1894年8月22日の「天討篇」では、「明治維新以降、天皇は藩主の権力を削ぎ、風気が一変したので、驕り高ぶり、兵力を乱用し、好戦的になっている」ともいう。

要するに、第一段階では、「次元」からみると、客観的物語と1894年7月23日以前の主観的物語は、主に好意的、積極的、理性的、幸せな「次元」が顕著である。また、1894年7月23日以降の主観的物語の次元は、上記の物語と比べて、好意的、理性的、積極的、幸せな「次元」とは異なる「次元」に変化する傾向が見える。次は、客観的物語と1894年7月23日以前の主観的物語の主題は主に近代的、軍事的、君民一心の君主という物語であるが、特に、1894年7月23日以前の主観的物語のほうが君民一心の君主という側面を強調している。1894年7月23日以降の主観的物語から見ると、近代的、軍事的、君民一心の君主という反復的パターンは崩れ始める傾向が見える。さらに、客観的物語と1894年7月23日以前の主観的物語では、天皇と他の登場人物の役割は常に行為の主体となる。1894年7月23日以降の主観的物語では、「西洋の新聞からみる日本の兵制」（「譯西報述日本兵制」）と「天討篇」から見ると、天皇は改革という行為の主体であるが、日本の人々の受け身の姿勢が見えるのだ。さらに、「日本人が戦端を開くことについて客人が語る」（「日人啓蒙客述」）では、日本の大臣は戦争を起こす原因となり、行為の主体であるが、天皇は受け身の姿勢となる。最後に、客観的物語と1894年7月23日以前の主観的物語では、天皇の行為を説明するために、比喩があまり使用されていないが、1894年7月23日以降の主観的物語では天皇の祈禱の行為を「抱佛脚」と形容している。

さらに、第二段階では、ほとんどの物語が主観的物語となる。これから、第二段階の主観的物語の内容を整理する。これらの物語では、天皇に関する主な内容は、戦争を主導することである。また、日本人から高額な金をあつめ、強制的に徴兵し、日本の人々を悲惨な境遇に陥れているとする。さらに、一部の将士に爵位、栄誉を与えているとする。

第二段階では、「次元」からみると、主に中国の伝統的文化と道徳から天皇を強く非難し、非好意的、消極的、情動的、不幸な「次元」を持ち、天皇は戦争の原因とされる。さらに、物語の主題は天皇が日本の民衆をはじめ、他国の人々に不幸をもたらし、不仁の好戦的暴君という反復的パターンが見

える。例えば、1894年10月26日の「威張り人民を虐げる」（「殘民以逞」）では、「日本人も同じように人民である。あろうことか彼らは好き勝手にされ、死地に置かれる。倭主はそれほど残酷で、彼は人の心を持っているといえるのか」という。また、天皇と他の登場人物の役割について、主に天皇をはじめ、一部の将士、大臣は戦争行為の主体となる。また、多くの日本の民衆、兵士は主に受け身の姿勢で現れる。例えば、1894年9月21日の「民間人を徴兵する」（「徴調民兵」）では、「日本の民衆は罪なき人であるが、こんなに迫害されている」と述べる。最後に、天皇の行為を説明するために、中国の古代の暴君の比喻を使う。例えば、1894年12月23日の「倭奴の窮境」（「倭奴窘狀」）では、「(天皇は) このように民衆を威圧するのは中国の暴君である桀、紂よりひどい」というのだ。

次に第三段階の二つのモデルの物語の内容を整理する。まず、第三段階の客観的物語は18点（ニュース18点）である。これらの物語では、天皇に関連する内容は主に行事（誕生日の祝い）、儀式活動（東京靖國神社合祀への参加）、政治活動（朝鮮大使、中国大使との会見、役人の任命、栄誉、賞金などの授与、政令の下达）、軍事活動（東京大本営の設立、東京大本営の軍務会議への参加、帰国兵士の慰労）、民間活動（九州災害の視察）、生活（皇太子の慰問、皇室の結婚祝い）などである。さらに、第三段階の主観的物語は23点（ニュース23点）である。これらの物語では、天皇に関連する内容は、行事（新年宴会、誕生日の祝い）、政治活動（上議院、貴族会、衆議院の行幸）、軍事活動（陸軍士官学校の行幸、汽車事故で被災した兵士の慰問、軍政の採用）、民間活動（歌会への参加、横浜の競馬会への参加）、生活（皇后との花見、皇女の誕生）などである。

ここで確認をしたいのは、客観的物語である1895年6月6日の「問答の要点」（「問答節略」）の中での、李鴻章と伊藤博文の対話である。この記事は第三段階の初めてのニュースである。このニュース以降、天皇に関する呼称は、第二段階での主に華夷秩序に基づく「夷」としての「倭主」や非合法で人民に支持されない「偽天皇」から、負の感情やイメージがこめられない呼称の時期に転換した。さらに、李鴻章は日清戦争において極めて重要な政治家であるだけでなく、「中体西用」論を提唱する「洋務運動」の指導者でもあった。「中体西用」論を擁護する洋務派は中国の伝統文明こそ本体であって、西洋の近代文明は応用にすぎないと主張した。したがって、日清戦争以前の「洋務運動」は西洋文明の技術的、物質的な事業ばかりに偏って、制度的、精神的な面を軽んじ、「夷狄の技を持て夷狄を制す」（師夷長技以制夷）という思想を持っていた。このような考え方には華夷秩序に基づく「自己」と「他者」の認識論的枠組みが潜んでいる。したがって、李鴻章自らの態度の変化は重要な意味を持つ。例えば、「(李鴻章)：貴国（日本）は貴大臣（伊藤）によってきちんと治められているのは非常に羨ましい（中略）（伊藤）：すべては我が国の皇帝陛下の功績である。私はその力をもたない。（李鴻章）：貴国の皇帝陛下はもちろん聖明であるが、貴大臣（伊藤）の支えも欠かせない」という。このニュースをきっかけに、第一段階の終盤や第二段階と比べて、天皇や日本の大臣、日本の制度に対する疑問や否定の態度は一変し、自国の

認識としては、伝統的「夷」より優れた「華」としての「自己」という認識が崩れ始めたと言える。

要するに、第三段階を「次元」からみると、客観的物語と主観的物語は、主に好意的、積極的、理性的、幸せな「次元」を有し、天皇が日本の近代化を成功に導いたとするのである。次に客観的物語と主観的物語の主題は主に近代的、軍事的、君民一心の君主という物語となる。また、天皇と他の登場人物の役割は常に行為の主体である。さらに、聖明的君主という比喻ないしモデルで天皇の改革行為を説明する。第三段階と第一段階の第1面の記事の割合からみれば、第三段階では、天皇に関する記事が1面掲載の比率が高かったことを述べておきたい。つまり、天皇に関する記事の重要度は上昇したのである。

5 まとめ

本論文では、日清戦争前後の天皇のイメージの形成の背景としての媒体環境と『申報』がどのように天皇のイメージを構築したのかを検討した。その結果、まず、日清戦争前後の上海を中心とする新しい公共圏と『申報』が、天皇のイメージが形成される場を提供したことがわかった。さらに、物語構造分析と物語内容分析を中心に、日清戦争前後の『申報』が構築した天皇のイメージは三つの段階によって変化し、この形成過程の中で、日本の新聞は重要な役割を果たしたことがわかった。

具体的に言えば、まず、当時、上海の媒体環境には水平的なコミュニケーションを促進する新しい公共圏が存在し、それは政治的権力からかなり自律しているという特徴があった。また、『申報』は独立した商業新聞でもあった。その上で、『申報』は「有聞必録」という原則を信奉し、多様な言説と種々のイデオロギーが並存するプラットフォームを提供した。このような媒体環境は日清戦争前後の天皇のイメージ構築の背景となったのである。

さらに、天皇の呼称によって1894年から1896年までを三つの時期に分けると、各段階でそれぞれの特徴が見えた。まず、戦前の第一段階では、客観的物語と主観的物語によって、主に近代的、軍事的、君民一心の君主という天皇のイメージが構築されたが、戦争が起こった直後に、近代的、軍事的、君民一心の君主というイメージが崩れ始め、日本の軍事制度、政治制度を疑問する態度が見えた。次に、第二段階では、主観的物語がほとんどとなり、中国の伝統的文化と道徳から天皇を強く非難し、不仁の好戦的暴君という天皇のイメージが築かれ、天皇は戦争の原因とされた。第三段階では、洋務派のリーダーである李鴻章の態度の変化をきっかけに、客観的物語と主観的物語によって、天皇のイメージが近代的、軍事的、君民一心の君主に戻って、その上で、天皇は日本の近代化を成功に導く重要な要因とみなされるようになった。この点は維新派の近代国民国家観、君主観と関連していると言えるだろう。

前述した通り、日清戦争の際、日本では言文一致という近代的文体が普及していたが、中国では、それが普及していなかった。さらに、一部の客観的物語のタイトルからみると、これらの物語は日本の新聞から翻訳されていた。つまり、日本の新聞における近代的文体で語る天皇に関する物語はそのまま『申報』に入りこみ、中国人読者に共有されたのである。また、主観的物語の情報経路から見れば、日本の新聞は他の新聞より多くの情報を提供していたことがわかる。要するに、日本の新聞は日清戦争前後の『申報』の天皇のイメージの構築過程に重要な役割を果たした。とくに、「天皇」という「他者」を客観化するために、日本の新聞が影響を与えていたのである。日本の新聞は中国における民族的「自己」を客観化することに一定の役割を演じたと言える。

ここで強調したいのは、まず、伝統的中国における華夷秩序の天下観からみれば、「自己」と「他者」は絶対的な境界線を持たず、客観化されえない存在であるという点だ。1840年のアヘン戦争から日清戦争まで、文化主義を中心とする華夷秩序の天下観は絶えず列強の挑戦を受けたが、伝統的な「自己」と「他者」の認識枠組みは依然として主流の位置を占めた。日清戦争の敗戦は「中体西用」論を提唱する「洋務運動」の失敗を意味し²⁶、それを契機に、維新派は日本と西洋の優越性を認め、伝統的華夷秩序の天下観から明確な領土的な境界線を画定する近代国民国家の形成に向けて動き出した。梁啓超は中国の弱体化した原因を、愛国心や国家思想の欠如、「天下があるのを知りながら国家があるのを知らない（中略）己があるのを知りながら国家があるのを知らない」という時代遅れの国民に求めた²⁷。こうした直線的時間において発展する世界史の視点からみる後進の「自己」と先進の「他者」という認識論的枠組みは、絶対的な境界線を持たず自他が曖昧なものから、明確な境界線を持ち、自他が客観化されたものに移行したと言える。さらに、「中国における愛国主義の起源を見る場合、日本の国民統合と強国化による刺激が大きかった」（吉澤誠一郎，2004：45）と言えるのである。日本の国民統合と強国化の達成に天皇が極めて重要な役割を果たし、それに対して、中国の維新派にとって中国を近代国民国家に変革する最も重要な方法は、光緒帝を明治天皇のような君主に生まれ変わらせることととらえるようになったのである。

以上のように、日清戦争前後の『申報』において、天皇のイメージがいかに構築されたのかを見てきた。これを踏まえて、その後、当時の中国の人々は「天皇」という「他者」の体験を通して、民族的「自我」ないし国家意識をどのように構築していったのかを分析することが可能となる。本論文ではその前提の議論を行なった。

謝辞

本稿執筆にあたり、始終懇切丁寧なご指導をいただきました渡邊浩平先生、鈴木純一先生に心より感謝致します。また、Alex Babulall先生、Richard Siddle先生には、要旨の英語表現について親切丁寧にご修正いただきました。そして、査読を担当して下さった匿名の2名の先生方から大変貴重なコメントをいただきました。ここに記して心から感謝申し

▶26 戚其章（2005）515頁-516頁を参照

▶27 梁啓超（2014）73頁；504頁-505頁を参照

上げます。本稿における瑕疵は全て著者の責任です。

参考文献

- アンダーソン, ベネディクト (2007) 『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』 書籍工房早山
- Britton, R S. (1933) *The Chinese periodical press, 1800-1912*. Kelly & Walsh, limited.
- Duara, Prasenjit. (1995) *Rescuing History from the Nation: Questioning Narratives of Modern China*. The University of Chicago Press.
- 大東文化大学中国語大辞典編纂室 (1994) 『中国語大辞典』 角川書店
- エーコ, ウンベルト (2003) 『物語における読者』 青土社
- 原田敬一 (2008) 『戦争の日本史19 日清戦争』 吉川弘文館
- 浜下武志 (1997) 『朝貢システムと近代アジア』 岩波書店
- 徐載平 徐瑞芳 (1988) 『清末四十年申報史料』 新華出版社
- 徐宝璜 (1930) 『新聞学綱要』 聯合書店
- 小森陽一 (1988a) 『文体としての物語』 筑摩書房
- 小森陽一 (1988b) 『構造としての語り』 新曜社
- 戈公振 (1928) 『中国報学史』 商務印書館
- Mittler, Barbara. (2007) *Joining the Global Public: Word, Image, and City in Early Chinese Newspapers, 1870-1910*. State University of New York Press.
- Mittler, Barbara. (2004) *A Newspaper For China? Power, Identity, and Change in Shanghai's News Media, 1872-1912*. Harvard University Press.
- 内藤湖南 (1993) 『清朝史通論』 平凡社
- 王曉秋 (1991) 『アヘン戦争から辛亥革命』 東方書店
- ラッセル, バートランド (1975) 『中国の問題』 理想社
- 梁啓超 (2014) 『新民説』 平凡社
- 李孝徳 (1997) 『表象空間の近代—明治「日本」のメディア編制』 新曜社
- Rowe, T. William. (2009) *China's Last Empire: The Great Qing*. Harvard University Press.
- 鈴木裕久・島崎哲彦 (2006) 『新版・マス・コミュニケーションの調査研究法』 創風社
- 邵振青 (1923) 『実際応用新聞学』 京報館
- 戚其章 (2005) 『甲午戦争史』 上海人民出版社
- 操瑞青 (2015) 「建構報刊合法性: “有聞必録” 興起的另一種認識—以《申報》“楊乃武案” 報道談起」 『新聞与伝播』 No.9, pp.99-116.
- 多木浩二 (1998) 『天皇の肖像』 岩波書店
- Wagner, G. Rudolf. (2007) *Joining the Global Public: Word, Image, and City in Early Chinese Newspapers, 1870-1910*. State University of New York Press.
- Wagner, G. Rudolf. (2001) The Early Chinese Newspapers and the Chinese Public Sphere. *European Journal of East Asian Studies*. Volume1.1, pp.1-35.
- 柳田国男 (1978) 『新編・柳田国男集・第七巻』 筑摩書房
- 山室信一 (2004) 『思想課題としてのアジア—基軸、連鎖、投企』 岩波書店
- 吉澤誠一郎 (2004) 『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国みる』 岩波書店

(平成30年4月16日受理、平成30年7月7日採択)

